

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 23 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24401046

研究課題名(和文) アンデス民族学画像から見えるもの

研究課題名(英文) Possibilities of Andean ethnographic photographs

研究代表者

加藤 隆浩 (KATO, Takahiro)

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：50185849

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究グループのメンバーは、「アンデス民族画像コレクション」のデータベースを作成する過程で、それが極めて高い文化人類学的潜在性を秘めるものであることに気付いた。しかし、従来の人類学的研究では民族写真は補助的な役割しか与えられず、貴重なコレクションであれ利用されることはあまりなかった。そこで、本研究は、他の研究機関が所蔵する画像にも目を向け、言語だけでは十分に表現できない社会・文化的側面に注目し、画像からアプローチする文化人類学の方法論の可能性をアンデス地域の事例で検討した。本研究では、文化資源としての民族写真を使って何ができるかを提示し、映像資料の復権を試みた。

研究成果の概要(英文)：In the course of building a database of "Andean ethnic photographs collection", we noticed that the visual materials contain the high potentiality to expand the horizon of the cultural anthropology. However, in the conventional anthropological studies the pictures have not been sufficiently estimated being considered just as an auxiliary instrument, even if it is a photograph collection of enormous value that can describe the details about the past and present of an ethnic group. Therefore, in the present study, paying attention also to the images that are released in other research institutions, we have considered the possibility of methods of cultural anthropology to approach from image as an example in the case of the Andean region, to get the thick ethnographic description that the language can not achieve in the socio-cultural aspects. In this study, we have also discussed how to utilize ethnographic photographs as cultural resource, and tried to rehabilitate these visual materials.

研究分野：文化人類学

キーワード：アンデス 写真 映像人類学 民族画像 文化資源

## 1. 研究開始当初の背景

(1) この研究グループの日本人メンバーは、2004 年以來 7 年がかりで南山大学人類学博物館が所蔵する「アンデス民族画像コレクション」(4.6 万枚)のデータベースを作成した。その過程で、その写真群は基本的な民族誌学的データ、つまり撮影日時、場所、被写体、撮影目的情報を備えており、極めて学問的に価値が高く映像記録としても文化人類学的潜在性を秘めるものであることに気付いた。

(2) 従来の文化人類学のフィールドワークでは、民族写真は調査者が、その場に居合わせたという「証拠写真」として大きな役割を担われる一方、調査が終われば、論文の記述の参考資料として使用される数枚を除けば、ほとんど顧みることなく死蔵状態になることが多い。大量の貴重なデータが写しこまれている筈であるのに、補助的な役割しか与えられず、貴重なコレクションであれ利用されることはあまりないのは、極めて残念であった。

(3) この研究グループのメンバーが本研究を開始する以前に手にしていた民族画像は、1960 年代から約 40 年間に日本人文化人類学者によって撮影されたものであった。そのコレクションは、世界有数の大きなものに相違ないが、広大なアンデス地域の事象を地域偏差も含めて詳細に検討しようとする、それだけでは不十分であることが分かっていた。したがって、民族画像資料を所蔵する他の研究機関の画像データを利用し、研究を推進する必要があると考えた。

## 2. 研究の目的

(1) 目に見えるものを細部まで正確に写しとる映像は、実証主義を標榜する文化人類学の黎明期から有用な資料、ツールと見做され、安価で高性能な映写機材の普及にとともに、今ではフィールドワークに出掛ける人類学徒の必携の道具となっている。しかし、それほどまでに重要視されながら、ひとたび調査

が終われば、画像は「その時」「そこに」「それが」あったという存在証明に使われるか、せいぜい説明を簡略化するための参照物といった扱いにすぎなくなってしまう。そこで、本研究は、さまざまな民族学画像を突き合わせ、言語だけでは容易に表現できない社会・文化的側面に注目し、画像からアプローチする文化人類学の方法論の可能性をアンデス地域の事例で検討した。本研究の目的は、文化資源としての民族写真を使って何ができるかを提示し、死蔵される傾向にある映像資料を復権させることであった。

(2) 南山大学人類学博物館所蔵の「アンデス民族学画像」は、国際的に知られた故友枝啓泰ら日本のアンデス研究者が撮影した写真からなる。当該地域の民族学画像のデータベースとしては世界最大であると同時に、当該地域を知り尽くしたフィールドワーカーたちが記録し、撮影時のデータも揃っているためその民族誌的価値は極めて高い。そこで、本研究では、それをハードディスクに「死蔵」させたままにしておくのではなく、国内外で積極的な活用を促し、学術貢献をめざすとともに調査地に対する責任を果たすことを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 写真は断片的であり全体像が見えにくいという短所をもつ。それを補うため関連のある画像を並べて配置し、文化人類学で重視されるホーリズムを確保した。同時に、写真の特性つまり細部にまでわたる活写性を活かし、経験や感情に左右されやすく選択的な人間の視覚では追えなかった事物まで取り込み、撮影対象の背景にある脈絡を可能な限り回復に努めた。こうした作業のあと、画像をクロノロジカルに配列し、プロセスとしての儀礼のシーケンスも捕捉した。

(2) 撮る者と撮られる者との関係は不変だが、写真は時空を自在に移動できるので、見る者と見られる者との関係は固定的ではな

い。しかも、写真は撮影者の意図とは別に、見る者の解釈を引き出すこともある。また写真は、再現されることで見た者の記憶をよみがえらせ、被写体に関する言葉を誘い出す。こうした写真の効用に注目し、撮影される側にいた人々に画像を見てもらい、彼らへの対面調査を実施した。写真を提示した後に行った調査項目は以下の3通り。

写真を提示しながら、被写体となっている事物のみならずその背後、さらにはそこに写し込まれてはいないが、それと関連する事柄にも注意し、記憶している事柄、考える事項を自由に語ってもらい、撮影後に得られたデータとして分析し、従来の知見に加えて民族誌学的資料の重層化をはかった。撮影時と現在との間に差異が認められる場合には、その原因、経緯、結果の説明を求めた。現存するもの場合にはそれを確認した。

写真は、過去を再現するものであるから、撮影された側にいる人々にとっては自文化（の歴史）に向き合うツールとなる。したがってインフォーマントが自文化の過去と対面するなかで、彼らがそれについてどのように考え、またそれに関連して現状をどのように把握するかの説明を求めた。こうした作業を繰り返すことで、現在から見た自文化のオーセンティックなイメージや創られ方、人々の歴史認識に関する民族誌学的資料を収集した。

「映像についての人類学」は、被写体となる人々に対する撮影者の眼差しを分析し、そこに政治的バイアスの問題が見え隠れする場合があるが、映像の意味づけは、現実には、映像が撮影者の手から離れると、見る者によって紡ぎだされる。そこで本研究では、撮影される側の人々が、自らが撮られた画像の何をどのように見るかについて検討し、存在するとすれば、それが撮影者の意図とどのようなズレを見せるのかをその背景も含めて考察した。

(3) 現地調査を実施する中でできるだけ多くの古写真の所在を突き止め、資料としてデータを残した。

#### 4. 研究成果

本研究では、画像の利用法に関して3通りを想定していた。第1は「撮影される側」、被写体の研究であり、第2は「撮影する側」の研究、第3には人が画像をどう見るかに関する研究である。その具体的成果は以下の通り。

(1) 第1の研究は、特定の瞬間に切り取られ、そのまま保存された過去をどう扱うかにかかっている。最も単純な方法は、画像を使って失われた過去を証拠立て復元することであった。この方法を使って、クスコ、ピウラ、ワンチャコ地方など、各地の儀礼、祭典、漁撈の様子を、すでに公刊されている新旧の民族誌と照合しながら詳細に再構成できた。

1枚の写真ではなく組写真となると、その一連の画像でもっと複雑な時間の動態が追える。その一例として、増殖儀礼の過程を再現できた。連続写真を使って何が、どのように行われたかを克明に描写し、それを民族誌あるいは撮影者のフィールドノートに照らしてデータを重層化していくと、儀礼の進行状況を正確に時系列に描写することが可能となった。こうした方法の応用として、時期を変え同じ場所から撮影した村落全景写真の比較をしてみると、村落の規模、村全体の佇まいまでがすっかり変わっているというようなことがよくわかった。もちろん、不変要素も指摘できた。

(2) ただし、この方法が有効であるためには同一の地域 原理的には等質の社会・文化を要件としている の民族画像を時系列に並べることで、静止画像に写しこまれた文化の諸相の変化を見る場合であり、実際、調査の中で個別に見てみたらペルー山間地域のクスコとアヤクーチョ、北部海岸地域のトゥルヒーリョの場合も同様であった。

(3) とはいえ、当初は上記の3地域を横断的に比較し、そこに変化を示す共通の示準軸のたたき台ができるのではないかと期待したが、現状では信頼に値するデータが不足しており、時期尚早と考えるに至った。予備的に行った比較からは、北部海岸地域では、社会・文化的変化のスピードが速いということが判明した。

(4) 先に述べたように、3地域共通の変化モデルの構築は、本研究では困難であったが、その代わりに、調査の途中で大量の「ポマバンバ民族画像コレクション」(個人蔵)が存在していることが判明し、その分析を進めることで、ポマバンバというアンデス高地の一村落での詳細な変化を110年以上にわたって写真で追いかけることができることが分かった。

(5) 「撮影者」についての研究は撮影者および撮影者を取り巻く価値判断が研究対象となった。撮影された写真には各々テーマがあり、それは撮影者自身の価値観と選択の結果として写し込まれている。したがって写真を年代ごとに並べると、一人の研究者の関心の変化がそこに垣間見え、その人の学問的関心を見てとることができる。また、それと同時に、アンデスの文化人類学の研究動向もそこに反映していることがわかった。

(6) 画像資料の3番目の利用法は、人が写真をどのように見るかであった。これは、撮影された画像を見せようという趣向である。この方法を調査中に繰り返し試みたが、興味深いのは、かつて被写体になった地域の人々にその写真を提示し、そこに写された事物について自由に語ってもらおうと、話が膨らみ、とめどなく言葉が出てくるという点であった。要するに、写真が人々から被写体に関する言葉を誘い出しているわけだが、そこで紡がれた言葉と、写真により再現されたイメージがさらに相乗効果を引き起こし、それが記憶を蘇

らせていること、また、時には、撮影者の意図とはまったく別に見る者の解釈を引き出す場合があるという点が重要である。

こうした民族画像の作用から「分厚い」民族誌的描写を引出すこともできた。たとえば、呈示する写真が本人を撮影したものではなくても、画像を見ながら、写しこまれた自然や事物を仔細に説明し始めると、やがてはそこに写っているはずのない当時の生活や人間関係にまで話が及び、詳細な民族誌データを蒐集できた(個人情報漏洩、人権侵害に注意しながらおこなったのは言うまでもない)。要するに、写真は過去から切り取られた一瞬の断片ではなく、それは見る人の心の中で自己の近似体験と接ぎ木され、連続する過去として言葉を紡がせる作用があると考えられる。

だとすれば、コレクションの写真を提示し、画像の各要素についてのインフォーマントへの聞き取りを続け、その調査結果を次々に付加していくと、既存のデータに新たな、より密度の濃いデータを盛り込むことができることになる。つまり、こうした作業を通し、画像データベースは、より詳細な民族誌学の基礎部分としてさらに進化していけるはずである。

民族画像を被写体となる側の人々に見せようとして、その画像が喚起するイメージが、見る人の心の中で膨張し、それがアイデンティティの核となり自己を発見していく契機につながったと考えられる事例が繰り返し現れた。民族画像の役割は、単に知識やデータを運ぶというレベルにとどまるものではないことを示す例だと言える。

(7) 研究グループが手にしている画像を被写体となった地域の方々に提示するので、地域の施設での展覧会等を開催し、画像をもとにしたミニアルバム『日本人によるペルー人類学(原書はスペイン語)』の刊行し、2013年9月にはペルー、リマ市で民族画像の展覧

会を開催(20日間)し、途中で、研究協力者ら4人を含め、画像を巡る国際フォーラムを開催した。

(8)2013年4月8月、10月12月まで、ペルー、クスコ市、マチュピチュ博物館において、国際会議ティンクイと連携し、民族画像の展覧会を開催した。研究代表者はティンクイで民族画像のもつ学術的価値についての講演を行った。

(9)2014年7月、4日間の合宿型の国際会議を伊勢市で開催し、世界各地で所蔵されている民族画像とその文化資源化の可能性について討議した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Takahiro Kato, "Los japoneses y la arqueología de las religiones", *Yuyaykusun*, Universidad de Ricardo Palma Lima, No.7, 2014, 187-194. (査読有)

Takahiro Kato, "Hijo del Sol: Un estudio comparativo", *Yuyaykusun*, Universidad de Ricardo Palma Lima, No.6, 2013, 213-229. (査読有)

[学会発表](計3件)

Takahiro Kato, "El valor academico de las fotos de la Costa", El primer Congreso Internacional de Andinistas, 2014.7.4. Universidad Nanzan, Aichi, Nagoya.

Takahiro Kato, "La invitacion a las fotografias tomadas por los antropologos japoneses", Simposio organizado por Embajada del Japon, APJ y Centro de Estudios Latinoamericanos de la Universidad Nanzan: La antropología peruana por los japoneses Retrospeccion y perspectiva, 2013.9.1, APJ, Lima (Peru).

Takahiro Kato, "Posibilidades de las

fotografias etnograficas", TINKUY, 2013.8.17, Universidad Nacional de Cusco, Cusco(Peru).

[図書](計7件)

Takahiro Kato, Wilfredo Kapsoli, Fondo Editorial de la Universidad de Ricardo Palma, Lima, *La Asociacion de Pro-indígena (una contribucion documental a la etnohistoria)*, (印刷中), 501.

Takahiro Kato, Fondo Editorial del Congreso del Perú, Lima, *Tejidos de sueños Imágenes y diestas en el mundo andino*, 2013, 288.

加藤隆浩、岩田書院、「博物館資料の境界：ペルーに戻ったマチュピチュ遺物」、『博物館資料の再生』、2013、pp.84-103。

加藤隆浩、岩田書院、「文化資源化と活用：アンデス民族学画像コレクションの取り組み」、『博物館資料の再生』、2013、pp.182-203。

Takahiro Kato, CIUF-UNSAAC, Cusco, "En torno al Señor de Wimpillay", *Laicidad Política, Estado y Religión*, 2013, pp.131-154.

Takahiro Kato, Fondo Editorial de la Asamblea Nacional de Rectores, Lima, "Hiroyasu Tomoeda en la coleccion de las fotografias etnograficas andinas" *Tomoeda: archivo etnofotografico Raqchi - Copacabana*, 2013, pp.11-21.

Takahiro Kato, Embajada del Japon, APJ y Centro de Estudios Latinoamericanos de la Universidad Nanzan, Lima, "Estudios andinos en Japon, veintidós años después", *La antropología peruana por los japoneses Retrospeccion y perspectiva*, 2013, pp.16-19.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

加藤 隆浩 (KATO, Takahiro)  
南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：50185849

(2)研究分担者  
(該当者なし)

研究者番号：

(3)連携研究者  
(該当者なし)

研究者番号：

(4)研究協力者

カプソリ・ウィルフред

(KAPSOLI, Wilfredo)

ミリヨネス・ルイス

(MILLONES, Luis)

マルチェナ・フアン

(MARCHENA, Juan)

オルティス・アレハンドロ

(ORTIZ, Alejandro)

ソラーノ・フアン

(SOLANO, Juan)

ベラスケス・オルランド

(VELASQUEZ, Orlando)

マイエル・レナタ

(MAYER, Renata)

マソッティ・ホセ・アントニオ

(MAZZOTI, Jose Antonio)

ロサス・ワシントン

(ROZAS, Washington)

藤井 龍彦

(FUJII, Tatsuhiko)

河邊 真次

(KAWABE, Shinji)

上原 なつき

(UEHARA, Natsuki)